

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25284019

研究課題名(和文)「現代思想」と政治 マルクス主義・精神分析・政治哲学を軸とする歴史的・理論的研究

研究課題名(英文) Post-/Structuralism and Politics: historical and theoretical research on the conjunction of Marxism, Psychoanalysis and Philosophy

研究代表者

市田 良彦 (Ichida, Yoshihiko)

神戸大学・国際文化学研究所・教授

研究者番号：70203099

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,700,000円

研究成果の概要(和文)：日本で「現代思想」と呼ばれ、1960年代以来フランスを中心に展開されてきた構造主義・ポスト構造主義の思想潮流を、「政治」との関連で再定義した。現在、文化研究方法論や文献注釈の対象として受容されている「現代思想」は、我々の観点からすれば、マルクス主義(資本主義批判)・精神分析(主体の地位の再審)・哲学(上記二契機の可能的出会いの探究)という三つの軸の交点における、「政治とはなにか」という問いへの歴史的応答の試みと位置づけられる。また、その共通の試みが、冷戦終結とともに終わることなく、現代の政治観をなお大きく規定し続け、制御困難なグローバル市場下の現状で再浮上していることを理論的に明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Our research succeeded to redefine Structuralist and Post-structuralist currents of contemporary thought, (mainly developed in France since 1960s, and designated as “現代思想” in Japan) in relation to “Politics”. Against their actual vulgarization as a methodology in Cultural Studies, or an object of exegetic commentaries, we described them as various historical responses to the question “What is Politics”, that aroused in the conjunction of Marxism (Critic of Capitalism), Psychoanalysis (Re-questioning the place of Subject), and Philosophy (Research on a possible Encounter of two afore-mentioned moments). We have also shown that these common attempts continue to contribute to our reflexions on Politics, and re-emerge even more vigorously in our on-going situation under the uncontrollable Global Market, without coming to an end with the Cold War.

研究分野：思想史

キーワード：政治思想 哲学 マルクス主義 精神分析

### 1. 研究開始当初の背景

1960年代のフランスにおいて生まれ、世界的には「(ポスト)構造主義」や「フレンチ・セオリー」とも呼ばれる「現代思想」は、我が国において二つの傾向をもって受容されている。まず、文学や映像といった文化現象や社会(史)的事象を扱う研究における方法論である。フーコー、ラカン、デリダ、ドゥルーズ=ガタリといった人々の諸概念は、出自や意味について特に説明を加えることなく、多くの人文科学系研究において基本タームとして用いられている。第二に、「現代思想」を構成する個々の思想家については、思想の成立と変遷をめぐる研究が思想研究の一分野として定着している。日本人の手になるモノグラフィもここ20年のあいだに次々に出版されるようになった。しかし二つの傾向のはざまに、「現代思想」総体を一つの思想運動として歴史的に捉え、その今日的な可能性を理論的に探る試みは、受容初期の頃に比べて少なくなっていると言ってよい。

### 2. 研究の目的

様々な「現代思想」を一つの思想潮流にした全体性を、それが出現し、開花した時代の「政治」との関係を通じて明らかにすることを目指す。出現の背景には「冷戦」という第二次大戦後の世界レベルにおける政治のあり方が深くかかわっていたことはよく知られている。個々の理論の内容をそうした大きな「政治」状況と照らし合わせながら、市場経済を前提とする自由主義でもソ連流の社会主義でもないオルタナティブを探る努力として、「現代思想」の全体を問題化する。とりわけその転換点となった1968年の世界的な「反乱」を重視し、この「出来事」に対する思想的応答として、個々の思想家の仕事を再検証する。そのことにより、「現代思想」に共通する問いとしての「政治とはなにか」を浮かび上げさせ、今日におけるその可能性を探る。こうした探求は欧米においても盛んに行われはじめており、その最前線に我が国からも合流する。

### 3. 研究の方法

マルクス主義・精神分析・政治哲学という三つの軸を立て、それぞれが「政治」とその変容をいかに問題化してきたかを探る。

(1)マルクス主義にかんしては、特に「階級闘争から社会運動へ」という68年以降の議会外政治の変化にどう対応したかを、それ以前にスターリン批判を受けてマルクス主義陣営内部で生起していた「疎外論的ヒューマニズム」論争、「政治の自律性」論争などと関連させて明らかにする。70年代以降については、アルチュセールのイデオロギー論からはじまった「再生産論的転回」と、ハーバースの言う「新しい社会運動」の關係に焦点を当てる。その際、マルクス主義に援用された「現代思想」を探ることが第一の目標となるが、同時に、「現代思想」のほうにマルクス主義から受けた影響も重視する。いわば新

しいマルクス主義として「現代思想」を読むという視座である。たとえばフーコーやドゥルーズ=ガタリがマルクス主義をどのように吸収しているかに着目する。

(2)精神分析にかんしては、理論的にはなによりその「主体」概念に着目する。フロイトの「無意識」を刷新したラカンの「主体」概念が、階級に代表される社会的アイデンティティに還元されない「主体性」を「現代思想」全体に提供したからである。「現代思想」を従来のマルクス主義的な基底還元論や実存主義的な「決断」(=決定)論から分かつ大きなメルクマールが、固有の精神分析を超えて受容されたラカンの「主体」概念であった。逆に、ラカン理論のほうも「現代思想」のみならず、1968年の「出来事」から有形無形の影響を受けており、特にその学派形成プロセスは68年の「政治」過程のただなかであったと言ってよい。こうした歴史的相互作用に注目することで、精神分析の純粹理論に新たな光を当てる可能性も探る。

(3)政治哲学にかんしては、「現代思想」そのものが、哲学一般を一つの政治哲学へと拡張する思想運動であったという視点をもつ。第二次大戦後のフランス哲学は、実存主義とエピステモロジー(科学哲学)の影響により、哲学の範囲を認識論や存在論といった古典的問題設定のそとへと広げる傾向をもつようになっていたが、そこに「すべては政治である」とみなす68年の思想が加味されることにより、哲学の対象は一挙に「すべて」にまで拡張され、同時に哲学そのものがもつ政治性が強く意識されるようになった。その点是最初から政治的な(=政治実践に寄与する)哲学を志向していたアルチュセールのみならず、フーコーやドゥルーズ=ガタリにも共通しており、「現代思想」を「現代思想」として人々に認知させる大きな要因となった。しかし、では個々の「現代思想」家がどのような政治観、政治理論を内包したかという点については、あまり顧みられなかったと言ってよい。とりわけ、冷戦崩壊以降に隆盛を極めるようになった「公共性」をめぐる政治哲学(アーレントやハーバースを援用する)との異同については、ほとんど探られていない。こうした視点から「現代思想」を読み直す。

(4)本研究に国際的な共同研究としての実質をもたせるべく、研究分担者がすでに有している海外ネットワークを活用する。具体的には、本研究参加者を積極的に海外に派遣して、資料調査や海外研究者との討論に当たらせるとともに、本研究と問題意識を共有する海外研究者を招聘して、シンポジウムやワークショップを開催する。

### 4. 研究成果

本研究の成果として、すでに2016年1月に18編からなる論文集『現代思想と政治』(平凡社、623頁)を刊行している。

(1)研究代表者である市田良彦の総説的論文

では、3年間にわたる延べ25回の研究会と3回の国際シンポジウムにおける議論を集約して、次の点を明らかにした。「現代思想」は「政治」との関係のなかではじまったが、思想としての受容にともない、次第にその関係が希薄になり、代わって「社会」や「倫理」との関係が重視されるようになった。すなわち一種のメタ「社会学」、メタ「倫理学」として「現代思想」は生き延びてきたが、それとともに、固有の「政治」思想/理論としての「現代思想」は現代の様々なリベラリズム潮流と見分けがつかなくなっている。「現代思想」は特に「ポスト構造主義」以降、「政治」の臨界点を探ろうとしてきた。デリダ派の「政治の後退」論、ドゥルーズ=ガタリの「リゾーム」概念、フーコーの「統治性」論はいずれも、「政治的なもの」が生成/消失する瞬間ないし契機を捉えようとしてしていると読むことができる。こうした論者がいずれも「政治」の概念を拡張したのに対し、68年以降は「現代思想」の内部から逆に「政治」を狭く限定しようという動きが現れた。旧アルチュセール派のバディウやランシエールである。しかしとはともに政治的「主体」を定立し直そうとしており、その際、ラカンやアルチュセールによる「意識的/イデオロギー的な主体性」への批判から出発するという共通点を有している。

(2)第1部「政治/哲学」では、まず小泉義之がドゥルーズ=ガタリの三共著(『アンチ・オイディプス』、『千のプラトー』、『哲学とはなにか』)を国家論として読もうとする。政治を問題にする「現代思想」がその後ほぼ完全に失ってしまう論点として、彼らの国家論を抽出する。王寺賢太は「現代思想」における特徴的な政治論が、いずれもマキアヴェッリの読解を経由して形成されたことを、ルフォール、アルチュセール、ネグリを通して明らかにする。佐藤淳二は「現代思想」によって切り捨てられたかに見える「疎外論」が、ルソー問題として「現代思想」の深部に受け継がれていることを確認する。上田和彦はブランショに独自の共同体論=権力論が存在したことを、ブランショの政治的なテキストの読解を通して浮き彫りにする。箱田徹は70年代中期のフーコーの「内戦」というパラダイムに注目し、そこに80年代フーコーの統治性論の新たな読み方を探る。布施哲は「現代思想」が等閑視してきた「宗教」問題に注目することで、フーコーとレオ・シュトラウスというこれまで比較されたことのない二人の思想家に逆説的な近さを発見する。

(3)第2部「資本/闘争」では、まず長崎浩が日本の68年を題材に、「政治運動」の実際のプロセスから「政治思想」が促されて析出される様態を描き出す。逆に「党」と「叛乱の大衆機関」の概念的矛盾が「運動」を規定することになった点も指摘する。沖公祐はアルチュセールのイデオロギー論の影響からはじまったマルクス主義の「再生産論的転

回」が、マルクス主義から資本主義批判の視座を逆に奪うことになってきた点に注目し、そうした再生産論の系譜を18世紀にまで遡る。佐藤隆は一見対称的に見える交換関係の基底に非対称的な債権債務関係を発見し、「経済」そのものを「政治」的権力関係と捉えてマルクス主義と「現代思想」の接合を図る。中村勝己はイタリア・オペライズモの代表的理論家であるトロンティの「社会的工場論」と「政治的なものの自律性」論を辿り直し、そこに意図せざる「現代思想」との接近を確認する。廣瀬純はネグリの「存在論」に旧アルチュセール派(ランシエールとバディウ)とは異なる「政治」観があることを明らかにする。長原豊はドゥルーズ=ガタリの『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』を現代の「資本論」として読む試みを展開する。

(4)第3部「主体/精神分析」では、まず中山昭彦が、今日では政治思想としての「現代思想」を代表している観のあるアガンベンを取り上げ、そのベンヤミン論がベンヤミンの可能性を逆に縮減するものであることを論じ、「現代思想」がそのまま「政治思想化」することの難しさを改めて指摘する。佐藤嘉幸はガタリの『アンチ・オイディプス草稿』のなかに、ドゥルーズ=ガタリのいわゆる「分裂分析」がラカンの「対象a」概念を出発点としている点を見だし、ドゥルーズ=ガタリとラカン理論の關係に新たな照明を当てる。松本潤一郎はドゥルーズの「差異」概念とバディウの「矛盾」概念を対照させ、「現代思想」が「政治」から離れていく契機になったのは、「矛盾」をヘーゲルとともに捨てたところにあったのではないかと指摘する。上尾真道は戦後フランスの精神医学史のなかに精神分析を位置づけつつ、精神分析の政治性は反精神医学であるところではなく、むしろ精神分析を「純粹精神分析」として医学から自立させたところであったのではないかと示唆する。立木康介は、ラカン派における分析家育成「制度」である「パス」が、いかに68年と響き合うものであったかを跡づける。それによれば、「パス」は「制度」であると同時に「制度」への「反乱」であり、ラカンによって精神分析のなかに持ち込まれた「68年」であった。

(5)研究期間終了までに以下四度の国際ワークショップ/シンポジウムを開催することができた。

一度目(ワークショップ)はカナダからギャビン・ウォーカー(マギル大学)を招き、本研究の第一の軸であるマルクス主義の変容をめぐる集中的な討論を行った(2014年2月1日、京都大学)。ウォーカーはマルクス主義の理論史と「現代思想」の双方に通暁する若手研究者である。

二度目(ワークショップ)はアメリカからクリスティーン・ロス(ニューヨーク大学)とハリー・ハルトゥニアン(コロンビア大学)

を招き、2014年11月13、14日に「革命・歴史・想像力」というタイトルで行った(場所：京都大学)。ロスはフランスの68年にかんする歴史研究の第一人者であり、ハルトゥニアンはアメリカにおける日本近代思想史研究を牽引してきた研究者である。

三度目は2015年1月12日に京都大学で行われた国際シンポジウム「Pourvu que ça dure... : 政治・主体・現代思想」であり、フランスからエティエンヌ・バリバル(パリ西大学名誉教授・コロンビア大学招聘教授)と、アメリカからブルーノ・ポスティールズ(コーネル大学)を招聘した。バリバルは旧アルチュセール派の一人であり、「現代思想と政治」をいわば50年にわたり生きてきた哲学者である。ポスティールズは英語圏へのパティウの紹介者であるに加え、現在世界的に進むマルクス主義復興運動を担う一人である。二人には本研究の代表者である市田良彦から、シンポジウムに先立ち、本研究の成果を踏まえた論文を送り、それに対する応答というかたちで発表を準備してもらった。シンポジウムでの発表と討論そのものが「現代思想と政治」をめぐる現在の理論的水準を集中的に示している。またシンポジウムとは別に、バリバルの近現代思想史の著作をめぐる研究会も氏を招いて行った(1月17日、京都大学)。

さらに、論文集の刊行後も、3年間の研究を締めくくるために、四度目の国際ワークショップを開催した(2016年3月19日)。本研究では積み残した課題となったアルチュセール-フーコー関係を集中的に議論するために、アメリカからバーナード・ハーコート(コロンビア大学)、オーストラリアからノックス・ピーデン(オーストラリア国立大学)を招き、「〈権力-知〉か〈国家装置〉か—68年5月 後のフーコーとアルチュセール」というタイトルで行った。ハーコートは70年代初頭のフーコー講義録の編纂者の一人であり、ピーデンは60年代後半、パリの高等師範学校で刊行されていた理論誌『分析手帖』の英訳アンソロジーを編纂している。同誌はアルチュセール派とラカン派の接点かつ分岐点となった雑誌で、今日、多くの研究者の注目を集めている。

なお三度目のシンポジウムの仏語・英語原稿は、すでに2016年3月刊の京都大学人文科学研究所欧文紀要 ZINBUN 46号「Contemporary Philosophy and Politics」小特集号として刊行された。また三度目のシンポジウムと四度目のワークショップの日本語の記録は、2016年度中に一冊の単行本として刊行予定であり、その際にはアルチュセールとフーコーをめぐる本研究参加者の論文も収録される。四度目の国際ワークショップの翌日、3月20日には前記論文集『現代思想と政治』をめぐる公開合評会も開催した。鶴飼哲(一橋大学)、檜垣立成(大阪大学)、森川輝一(京都大学)を講評者として招いた

合評会の記録は『週刊読書人』2016年4月22日号に一部が記事として掲載されたほか、その全体が電子書籍として2016年9月に刊行予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計18件)

Yoshihiko Ichida, Histoire et politique : conjonction et partage originaire chez Althusser (1962-1967), Cahiers du GRM, 査読有、No.7 2015, <https://grm.revues.org/607>

Yoshihiko Ichida, Hero (post-)structuraliste, politique de politique, ZINBUN, 査読有、46巻、2016, pp.3-20

小泉 義之、自閉症のリトルネロへ向けて、現代思想、査読無、43巻9号、2016, pp.86-99

佐藤 隆、拡大再生産における固定資本と減価償却、大分大学経済論集、査読有、67巻(1/3)、2015, pp.1-27

中山 昭彦、シネマのために一編の特異なフィルムが、層、査読有、8巻、2015, pp.62-82

Junji Sato, L'anomalie solitaire : le cas Otanés et la politique de J.-J. Rousseau, ZINBUN, 査読有、46巻、2016, pp.59-74

Kosuke Tsuiki, Amour en anamorphose : l'amour courtois et l'amour fou, II, PSYCHANALYSE, 査読有、29巻、2015, pp.63-79

Kenta Ohji, La fin de l'ancien régime en Europe selon l'Histoire des deux Indes de Raynal, Oxford Studies in the Enlightenment, 査読有、10巻、2014, pp.117-136

佐藤 吉幸、立憲デモクラシーの危機と冷害状態：デリダ、アガンベン、ベンヤミン、シュミットと「亡霊の回帰」、思想、査読無、1085号、2014, pp.88-104

小泉 義之、出来事(事象)としての人生：ドゥルーズ『意味の論理学』における、哲学雑誌、査読有、128巻800号、2013, pp.56-74

[学会発表](計24件)

Yoshihiko Ichida, François Matheron, Entre Spinoza et le groupe Spinoza, 2015.6.6、パリ(フランス)

Yoshiyuki Sato, Production of the competitive subject : Foucault and

Neoliberalism, 2015.11.8、上海（中国）

立木 康介、夢の潜勢力：革命的に目覚めること、日本フランス語フランス文学会、2015.5.31、明治学院大学（東京都）

沖 公祐、所有：所有は豊かさをもたらすか、経済史学会、2015.5.31、滋賀大学（滋賀県）

Kenta Ohji, Overcoming Modernity?: Iwao Koyama's Philosophy of World History (1942) and its critics, 2016.2.8、フィレンツェ（イタリア）

市田 良彦、（ポスト）構造主義のヒーロー、政治の政治、国際シンポ「政治・主体・現代思想」<sub>1</sub>、2015.1.12、京都大学（京都府）

Kenta Ohji, L'heure solitaire de la dernière instance ne sonne jamais: à propos des premières réceptions d'Althusser au Japon, 2015.3.20、パリ（フランス）

佐藤 淳二、来たるべき一般意志：切断と連続、立教大学シンポジウム「来るべき一般意志：法・主体・フランス革命」<sub>1</sub>、2014.3.15、立教大学（東京都）

佐藤 吉幸、Quelle philosophie est possible après Fukushima?, 2013.4.8、パリ（フランス）

立木 康介、オートフィクションとしての理論：フロイトのケース、シンポジウム「生表象の近代：自伝・フィクション・学知」<sub>1</sub>、2014.2.1、一橋大学（東京都）

〔図書〕（計24件）

市田 良彦、王寺 賢太 他、平凡社、現代思想と政治—資本主義・精神分析・哲学、2016、623

佐藤 吉幸 他、人文書院、脱原発の哲学、2016、466

立木 康介、水声社、狂気の愛、狂女への愛、狂気のなかの愛—愛と享楽について精神分析が知っている二、三のことがら、2016、239

長原 豊、航思社、ヤサグレたちの街頭—瑕疵存在の政治経済学批判、2015、505

廣瀬 純、航思社、資本の専制—奴隷の反逆、2016、379

小泉 義之、河出書房新社、ドゥルーズと狂気、2014、378

市田 良彦、航思社、存在論的政治、2014、578

立木 康介、河出書房新社、露出せよ、と現代文明は言う、2013、301

市田 良彦、王寺 賢太 他、河出書房新社、債務共和国の終焉、2013、232

廣瀬 純、月曜社、絶望論、2013、222

〔その他〕

雑誌小特集

ZINBUN 46, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2016/3.

ホームページ等

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~philopolitics/>

<http://www.zinbun.kyoto-u.ac.jp/~archives-mai68/index.php>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

市田 良彦 (ICHIDA, Yoshihiko)  
神戸大学国際文化学術研究科・教授  
研究者番号：70203099

### (2) 研究分担者

小泉 義之 (KOIZUKMI, Yoshiyuki)  
立命館大学先端総合学術研究科・教授  
研究者番号：10225352

### (3) 研究分担者

長原 豊 (NAGAHARA, Yutaka)  
法政大学経済学部・教授  
研究者番号：10155963

### (4) 研究分担者

佐藤 淳二 (SATO, Junji)  
北海道大学文学研究科・教授  
研究者番号：30282544

### (5) 研究分担者

立木 康介 (TSUIKI, Kosuke)  
京都大学人文科学研究所・准教授  
研究者番号：70314250

### (6) 研究分担者

王寺 賢太 (OHJI, Kenta)  
京都大学人文科学研究所・准教授  
研究者番号：90402809

### (7) 研究分担者

田中 祐理子 (TANAKA, Yuriiko)  
京都大学人文科学研究所・助教  
研究者番号：30346051

- (8)研究分担者  
佐藤 隆(SATO, Takashi)  
大分大学経済学部・准教授  
研究者番号：5 0 3 8 1 0 2 5
- (9)研究分担者  
布施 哲(FUSE, Satohi)  
名古屋大学国際言語文化研究科・准教授  
研究者番号：6 0 3 4 5 8 4 0
- (10)研究分担者  
沖 公祐(OKI, Kosuke)  
香川大学経済学部・教授  
研究者番号：6 0 3 6 1 5 8 1
- (11)研究分担者  
信友 建志(NO BUTOMO, Kenji)  
鹿児島大学医歯学域歯学系・准教授  
研究者番号：6 0 7 3 5 3 4 8
- (12)研究分担者  
廣瀬 純(HIROSE, Jun)  
龍谷大学経営学部・教授  
研究者番号：7 0 3 8 8 1 5 6
- (13)研究分担者  
中山 昭彦(NAKAYAMA, Akihiko)  
学習院大学文学部・教授  
研究者番号：8 0 2 6 1 2 5 4
- (14)研究分担者  
上田 和彦(UEDA, Kazuhiko)  
関西学院大学法学部・教授  
研究者番号：9 0 3 1 3 1 6 3
- (15)研究分担者  
佐藤 吉幸(SATO, Yoshiyuki)  
筑波大学人文社会系・准教授  
研究者番号：9 0 4 2 0 0 7 5
- (16)研究分担者  
藤井 俊之(FUJII, Toshiyuki)  
京都大学人文科学研究所・助教  
研究者番号：3 0 6 3 6 7 9 1
- (17)連携研究者  
箱田 徹(HAKODA, Tetsu)  
大阪市立大学都市研究プラザ・特任助教  
研究者番号：4 0 5 7 0 1 5 6